

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

# 習慣と類型 発生的現象学における実践概念としての類型

著者	増田 隼人
著者別名	MASUDA Hayato
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	55
ページ	1-17
発行年	2019-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00010628/">http://id.nii.ac.jp/1060/00010628/</a>

# 習慣と類型

## ——発生的現象学における実践概念としての類型——

文学研究科哲学専攻博士後期課程3年

増田 隼人

フッサールは『経験と判断』において、習慣とは、我々が生活世界において生きるにあたって行う認識、実践、価値づけといった諸行為を行う中で獲得されたものであり、様々な生活状況における決断と行為にあたって安定感を与えるものだとしている（vgl. EU, 51f.）。習慣は私達の経験が沈殿することによって獲得された形成物であり、フッサールが言うように、私達が生きる上での様々な労苦を軽減し、安定化させる。もしも習慣が形成されることがなければ、私達が日々の生活をこなすことは非常に困難なものになるだろう。本稿では、フッサール現象学において「習慣的な所有物」（EU, 137）のひとつに数えられる「類型」の概念について考察することを通して、習慣ないしは類型が如何に私達の生を安定化させ、世界を「慣れ親しんだ世界」として構成しているかを考察する。この際、問題となるのは、フッサールにおける様々な「習慣的な所有物」の中でも、とりわけ類型の概念が如何なる地位を占めているかであり、それがどれほどの拡張性を備えた概念であるかである。『経験と判断』においては、類型化は基本的に知覚認識の構成における本質的な契機とみなされているが、本稿ではそれが衝動や行為の主体としての身体性と本質的に結びついていることを指摘する。

本稿の構成としては、(1) フッサール現象学における習慣性概念の全体的位置づけを行った後、『経験と判断』の記述を通して、主に知覚対象の構成に関わる類型化の機能の粗描をまず行う。次いで、(2) 内的時間意識との関係を軸として、類型の形成のされ方と、類型の形成が時間意識において及ぼす積極的役割を考察する。このとき強調されるのは、とりわけ予期との関係である。この分析を通して明らかになるのは、類型化の機能は、それ自体で完結して働く機能ではなく、衝動や関心の中を生き抜く、自我の全体的な生との関連において初めて正確に捉えられることである。最終的には、(3) 類型化は、知覚認識の構成においてのみ適用される概念ではなく、周期的な反復を通した「状況（Situation）の類型化」という契機を介すことによって、受動性における斉一的なシステムとして自我の全体的な生のリズムを作り上げ、安定化させる実践的概念として捉えられることを明らかにする。

## 1. フッサールにおける習慣性と類型の概念の粗描

### 1-1. 習慣性概念

フッサールにおいて、習慣性（Habitus、ないしはHabitualität）は、彼の自我分析が、空虚な極としての純粹自我から、心身を備えた具体的人間としての人格的自我へとその主題を移行した際に中心的となった概念である<sup>1</sup>。こうした議論において、フッサールが使う習慣性という語は、個別のルーティンや社会的慣習といった日常的な意味を超えている。すなわち、その概念は、自我が瞬間的な極として存在するのではなく、時間的に存続しており、そこにおいて以前の行為が沈澱し、未来に向けてある種の類型的な志向の様式を作り上げるといふ、その継続的な能作の全体を指すために使われているのである<sup>2</sup>。いわば、フッサールにおいて習慣性は、人間の時間性や歴史性を象徴する概念であり、自我はまさにその「習慣性の基体」（Hua I, 100）であるとみなされている。自我の時間性についての考察を経て導入されたフッサールの習慣性概念は、いわば超越論的な概念としての性質を帯びており、日常的な臆見を括弧入れすることから始める現象学の考察の中にあっても正当な権利をもって導入されることになったのである。

しかし、その一方、フッサールの膨大な草稿群の中にあっても、“Habitualität”や“Habitus”という語が主題的に論じられる機会は思いのほか少ないというのも事実である<sup>3</sup>。そして、フッサールにおいて習慣性という語が、ある種包括的な概念として用いられており、その適用範囲があまりにも広いことも相まって、どこか具体性を欠いた、曖昧な印象を読み手に与えてしまっていることも否定しがたい。とはいえ、このことは、フッサールが、私達の生きる具体的現実における個々の習慣を度外視していたことを意味するのではない。むしろ、実情は逆であるとさえ言ってよい。

Moranは術語的な観点から見て、フッサールは習慣性という語を名詞的に用いるよりも形容詞的に用いることの方が多いと指摘している<sup>4</sup>。Moranによれば、このことは、フッサールが習慣性という概念そのものを主題的に論じるよりも、他の個別的な能作について論じる際に、「何某は習慣的（habituell）である」という仕方で、操作的概念として用いることが多いことを示唆している<sup>5</sup>。そのため、フッサールの習慣性概念が具体的にどのようなものであるのかを問い、その重要性を正しく認識するには、表面的に「習慣性」という語の使用箇所を見ればそれでよいということにはならず、習慣性概念の適用範囲を柔軟に取って、その周辺概念の考察を経由することによってこそ、かえってその具体性と豊かさが明瞭になる。そして、その周辺概念というのが、たとえば、「動機づけ（Motivation）」であり、「予期（Erwartung）」であり、「能力（Vermögen）」であり、本稿で述べる「類型（Typus）」である。そして、これらは全て習慣的であるという仕方で軌を一にしている。

## 1-2. 類型概念

フッサールは、『経験と判断』において、「発達した意識の成立以前にすでに、あらゆる諸対象の一定の類型化が予描されている」（EU, 35）と述べている<sup>6</sup>。私達の経験において、諸対象についての認識活動が行われる際、この対象がまったく無規定の基体として与えられることは決してない（vgl. EU, 26）。諸対象は、つねに何らかの既知性ないしは慣れ親しみ（Vertrautheit）をもったものとして我々に与えられるのであり、そこにはつねに「経験の地平」（ibid）が伴われている。そして、この既知性の枠組みとしてそこで考察されているのが、過去の経験から獲得された「習慣的な所有物」（EU, 137）である類型である。

類型は、ある個別的对象、ないしは類似的・同等的な諸対象のグループを「何某」として規定する働きを為しており、フッサールは類型を「経験的一般性」として定義している（vgl. EU, 32）。「形態学的本質」とも呼ばれるこのような一般性は、経験的な諸事物の特徴を帰納的に把握することで得られる<sup>7</sup>。それはたとえば、「四本足」、「尻尾を振る」、「黒目がちの瞳と湿った鼻」といった共通する諸特性を備えた諸基体が、反復的に経験されることで類似性の総合を通して過去の地平において統一的な布置を成し、「犬」という類型を形成するといった仕方である<sup>8</sup>。そして、ひとたびこうした類型が形成されると、それと類似した感性的与件を備えた基体が再び現在において現れた際、以前に形成された類型が連合的に覚起されて現在の与件と合致総合し、「犬」という既知のものとして類型化された知覚対象が構成されることとなる<sup>9</sup>。こうした類型の成立は、それが経験的一般性と言われることから分かるように、知覚的に現れる諸対象の構成とその経験を基礎としたものであり、究極的には、受動的な先構成の層に起源を持つものである。フッサールは、「経験のあらゆる対象が元から類型的に既知のものとして経験されるのは、あらゆる統覚が沈殿し、連合的覚起に基づいてその統覚が習慣的に影響を与えていることに根拠を持つ」（EU, 385）と述べている。そのため、知覚される対象は、ただ眼前の感性的与件によってのみ構成されるのではなく、「類型性に基づいた統覚的転移」（EU, 140）を通して既知のものとして構成されるのである。ローマーは、こうしたことから知覚を、「類型化する統覚（typisierende Apprezeption）」と称し、知覚対象の構成プロセスにおける類型の本質的役割を強調している<sup>10</sup>。

ところで、上記においては「犬」という類型を例に出したが、類型の一般性には様々な程度差が存在していると考えられる。たとえば、「犬」よりも一般性の高いもので言えば、「四足動物」や「生き物」などの類型が挙げられるが、さらに一般性を上げれば、究極的には世界内の「存在者」というような、ただ存在の確信のみが含まれているだけの殆ど未規定的な類型へと行き着く（vgl. EU, 35）。また、逆に、それがより細かく規定されていけば、「シェパード」や「柴犬」といったような、より特殊な類型が構成されうる<sup>11</sup>。さらに、もしもある特定の犬に個人的によく慣れ親しんでいるのであれば、その犬を「ポチ」という固有の存在として捉えたり、その時々体調の良し悪しなど個体の細かな状態すらも瞬時に類型的に

統覚できるようになると考えられよう（たとえば、「元氣のないポチ」、「機嫌の悪い母親」など）<sup>1213</sup>。

このように、類型にはその一般性の程度差に応じて、様々なものが考えられる。また、当然ながら、「犬」と「猫」、「水」と「火」のように、その事物の持つ性質の違いに応じて多種多様な類型が考えられる。しかしながら注意すべきは、諸類型はただ別個に独立しているわけではないということである。諸類型間の関係は、「特定の实在物（そして实在物から構成されたもの）としてのあらゆる特殊類型は、その無限性において全世界地平に属する総体性の類型（Totalitätstypik）に取り囲まれている」（EU, 32f.）というフッサールの言葉に端的に示されるように、より一般性の高い類型、より広い外延を持った類型が、特殊な類型を包摂するような関係を築いている<sup>14</sup>。このことは、現在の感性的与件によって、意識の前景に「ポチ」という限定化された特殊な類型が際立って浮かび上がったとしても、その背景においてはより一般的かつ広範な類型が同時に覚起され、暗黙裡に働いていることを意味する。そのため、たとえば、よく見てみればそれが「ポチ」ではなかったということがあったとしても、それが「犬」であり、「柴犬」であるという大枠の認識は崩れないままに、ただそれが「ポチ」ではないというだけの限定的な認識の置き換えのみで修正は済まされるのである<sup>15</sup>。

## 2. 予期における類型化の機能

このように類型化は、私達の認識活動を安定化し、私達の経験において現れるあらゆる諸対象——いわば私達の生活する世界を、慣れ親しんだ世界として構成することに寄与している。そこでの類型の働き方は、過去の地平に沈殿して形成された類型が現前へと向かって再度浮上してくるという仕方であり、内的な時間意識の諸能作と深い関わりを持っているのは明白であるが、次のことに注意が必要である。すなわち、この類型化は、諸対象についての過去の経験に基づきながら我々の認識活動を助ける働きをするものの、過ぎ去ったものを意識的に呼び起こす再想起として活用されるのではない、ということである。というのも、先述したように、実際の認識プロセスにおいて、各類型が逐一すべて意識に前景化されるということはまずないからである。「受容性のあらゆる諸対象はもともと、なんらかの既知の類型の対象として立ち現れる」（EU, 240）<sup>16</sup>とフッサールが述べているように、知覚対象の構成プロセスにおける類型化は、自我が対向するその段階で、既に先所与性の次元において予描として働き、「その対象は何某である」という規定を先構成しているからである（vgl. EU. 35）<sup>17</sup>。ローマーは、フッサールにおける類型の概念を「知識（Wissen）」ではなく、「認識（Erkenntnis）」の領域において語られるべきものと論じているが<sup>18</sup>、それは類型が意識的に思い出されるような仕方に対象に当てがわれるようなものではないことに由来している。

また、この規定化の働きは、「経験の個別的対象について認識活動が行われる際に、この



対象が最初にまったく無規定の基体として与えられることは決してない」(EU. 26) と述べられているように<sup>19</sup>、経験において初めて与えられる対象や、曖昧にしか与えられていない対象についても例外ではない。たとえば、初めて訪れた街の曲がり角に差し掛かったとき、私達は視界に映らない曲がり角の先についての個別的な類型を未だ所持していない。しかし、その曲がり角の先にもまだ道が続いており、例えばそこには人が歩いていたり、ビルが並んでいるだろうというような、暗黙的な期待は持っている。そうでなければ私達は、角を曲がるたびに未知の可能性に緊張を強いられることになるだろう。このことはすなわち、「その曲がり角の先の道」についての個別的類型を所持していない場合も、今まさに歩いているこの道の斜映をも含めた、これまでに出会った道の総体としての類型が、予期における可能性の範囲として働いているからに他ならない。そして、実際に曲がり角の先を目にしたとき、総体としての道の類型を背景として、新たに出会った道についての個別的類型が形成される契機を得るのである。類型的な一般性はここにおいて、認識される実在物が取りうる特定の可能性の形式であるとされ、予期の範囲として可能性の幅をつくっているのである (vgl. EU. 32)。

このように諸類型の連関によって織り成された既知の地平は、予期の可能性の範囲を規定している。事物に慣れ親しむとは、より細かく規定された個別的類型の形成を通して、予期の可能性の範囲を狭めていく（換言すれば、予期をより正確かつ効率的に安定化させていく）ことと解することができる。とはいえ、たとえ個別的な類型が形成された後になっても、その都度現れる状況は変転しうるものであり、各類型の妥当性にはつねに未規定性が残されていることも付け加えねばならない<sup>20</sup>。たとえば、それまで通勤で使っていた道路が工事によって通行不能になっていたという状況は容易に考えられるだろう。事物が常に変転の可能性に晒されている以上、それに相関する類型も常に修正の可能性を持っているのである (vgl. Hua XLI, 235)。このとき、私は、これまで使用してきたその道の類型の内容を部分的に修正する必要に迫られることとなる。類型は、たしかに諸々の与件に何らかの既知的な規定性を与えるが、その規定性は既に完結してしまったものとしてあるのではなく、つねに知の刷新の可能性が含まれているのである。

しかしながら、元々あった類型に私が慣れ親しんでいけばいるほど、その類型の修正が難しくなるのもまた事実である。先の道路の例で言えば、その道路が今は通行不能であることを既に知っているにも関わらず、つい慣れ親しんだその道へ体が向いてしまうということは容易に考えられるだろう<sup>21</sup>。「習慣的な所有物」として構成される類型は、その妥当性を失った後でさえも自我の活動を制限してしまうような強力な固着性を同時に持っているのである。それゆえ、習慣はときに、「もはや意識の注意を受けないがために不自由で機械的になりがちである」<sup>22</sup>とか、「習慣的な行動は洞察力を伴って顧慮されないがゆえに「盲目的」に映る」<sup>23</sup>というようにその負の側面を述べられることもある<sup>24</sup>。とはいえ、このような事態は裏

を返せば、私達が日常生活において如何に習慣に従って生きているかを示す証左とも言えよう。

習慣と予期の関係について、フッサールは、『受動的綜合の分析』において、「この統覚的な予期の力は、諸般の例の数に応じて——あるいはそれと同じことだが、習慣によって増大する」(Hua XI, 190)と述べている<sup>25</sup>。このことは、知覚対象の構成において類型化が行われるとき、どの類型が優先的に覚起されるかは、単に感性的与件の類似性の程度だけではなく、自我が如何に多くそれを反復的に経験したかが大きく関与していることを示している。たとえば、見慣れない英単語を目にしたとき、私達は該当の単語について学んだことがあったとしても、比較的使い慣れていて尚且つ形態的に近い、別の単語の意味を先に思い起こしたり、見間違えたりすることもあるだろう。また、フッサールは、過去地平に沈殿した空虚表象がもつ触発の力の強さを決定するのは、「広義の意味での、または広い意味での<関心>、すなわち特定の情緒がもつ根源的な価値づけや、獲得された価値づけ、本能的な衝動、あるいはそれより上層に属する衝動であろう」(Hua XI, 178)と述べている<sup>26</sup>。たとえば、慣れない土地で孤独に苛まれている人は、些細な共通点だけをもって、見知らぬ通行人の後ろ姿に友人を重ね合わせてしまうこともあるだろう。いわば、人恋しさの衝動が、「友人」という類型ないしは空虚表象を覚起し、見知らぬ人影とその類型を結び付けてしまったのである。

このように、類型化の場面においては、単に外的な諸対象やその認識のみが問題になるのではなく、その人の置かれた文化的・心理的状況や、蓄積してきた経験といった、習慣的自我として形成されてきたその人の歴史全体を考慮することが求められるのである。

ただし、このとき注意したいのは、上記の例では、衝動や関心と言われるものが一方的に類型化の機能を基づけているように捉えられるかもしれないが、実際にはそうではないということである。フッサールの発生的現象学における発達描写は、類型的な統覚の構成の記述と全体的に似通っている。類型的な統覚は、一般に、類似ないしは同等の対象との繰り返しの出会いによって構成されるものであるが、実践的な能力や衝動もまた、当該のものの反復的ないしは「練習 (Übung)」によって同様に調整されていくものと言われる (vgl. Hua IV, 258)。フッサールによれば、あらゆる幼児は、歩いたり走ったりという高次な能力だけでなく、頭や手や目を随意的に動かす方法さえ、反復を通して習得する必要があるとされており、たとえば、1930年代のC草稿では、フッサールは単なる本能的な不随意運動から、随意運動が如何に現れるのかを考察している。そこにおいて事例として出されるのは、母親が幼児に授乳をする場面であり、母親の胸の香りが「本来的に相応したキネステーゼ」(HMat VIII, 326)を引き起こし、その本能的な動きが周期的に繰り返される中で次第に志向的な意思の統一ができあがってくるというものである。いわば、それは、目的を欠いた曖昧な不足感としてしか働いていなかった本能が、「空腹の衝動」として自覚され、授乳という目的へと向かう類型的な衝動、類型的な運動が形成されてくる場面の考察なのである<sup>27</sup>。その意味

では、私達の衝動が、現在の私達にとって馴染みのある衝動として形成されてくるためには類型化の契機を介している必要があるのである。フッサールにおいて「習慣的」と言われる諸能作は、フッサールの分析において、いわば相互浸透的とも言うべき関係性を有していると言えよう。

### 3. 状況の類型化と——日常生活の構成

類型化の機能は、知覚対象の構成の場面に限らず、自我の実際の行為や関心といった実践的な経験との関連において捉えられる。しかし、重要なのはそれらが如何に斉一的に、システム全体として機能しうるのかである。たとえば、思わず煙草を手に取りるとき、そこで手を動かすのは連合的に習慣化された「盲目的な衝動」(Hua IV, 222)の力であると考えられる。しかし、もしもこの喫煙の衝動のみが突然に際立ちを得るのであれば、「思わず」手を動かす前に欲望ないしはそれに対する葛藤が意識において前景化し、煙草を手に取りかどうかどうかはやはり能動的な判断に委ねられることになるだろう。他方、受動的な動機づけに基づけられているとはいえ、「思わず」手を伸ばせるのは、我々の身体の動きがいつでも反復可能な実践的可能性において常に受動的に備えているからである。もしそうでなければ、手を動かし始めるその初動において既に、手を動かす行為そのものに自我の注意が向けられてしまうだろう。また、思わず手を動かした結果、煙草ではなく筆箱やコップを手にとらないのは、やはりその行為と衝動に相関する客観物の目的表象として、類型化を通した知覚の構成が、先所与性において既に進行しており、それが慣れ親しんだ事物として受容されているからであろう<sup>28</sup>。

ここにおいて見られるのは、それぞれ別個のものに思える諸契機が、それぞれが無意識的なままに同期しつつ機能していることである。すなわち、知覚対象の類型や行為能力、諸関心などの諸契機は別個に動いているのではなく、斉一的なシステムの中で、いわば自我の生活の一連の流れの中で取り纏められて働いていると考えられる。そして、そこで議論の俎上に上るのが、フッサールの「状況 (Situation)」という全体性を示した概念であり、その状況の類型化である。

しかし、状況を類型化するとは如何なることであろうか。前言してしまえば、それはすなわち自分にとっての慣れ親しんだ日常的な世界を構築するということであり、その日常生活世界の中に住まうことである。Ferencz-Flatzは、こうした状況の類型化における重要な成素として以下の三つのものを挙げている。すなわち、a)「関心の習慣」、b)「正常性」、c)「周期性」の構成である<sup>29</sup>。本節では、このFerencz-Flatzの分析に基づきながら、私達の日常生活が「状況の類型化」という契機を介して如何に構成されているかを見てみよう。



#### a) 関心の習慣

自我の関心、ないしは動機づけについての考察は、『イデーⅡ』や『受動的綜合の分析』における議論に顕著に見られるものである。先述のように、フッサールは、後者の草稿において、過去地平に沈殿した空虚表象が再び触発的になる場合、そのとき最も有効な動機は、「広義の意味での、または通常の意味での「関心」、つまり特定の情緒のもつ根源的な価値付けや、獲得された価値付け、本能的な衝動、あるいはそれよりも上層に属す衝動であろう」（Hua XI, 178）と述べている。ここで挙げられる関心の中でも、とりわけ本能や衝動は、受動的動機づけ（ないしは連合的動機づけ、習慣的動機づけ）として『イデーⅡ』においても集中的に論じられている。フッサールは、本能や衝動に絡み合うところの習慣を、動機づけにおける「第一の法則」と呼び、その根本性を強調しているのである（vgl. Hua IV, 223）。

自我の個々の関心はその都度の状況により移ろうものではあるが、それらは同時に、後の自我の関心全体に傾向性として影響を残していく<sup>30</sup>。フッサールはその一例として、「実業家の現実の職業生活（「会社内」）において、彼の特定の職務上の関心事は瞬間的なものではあるが、その瞬間的な関心を通じて、常に彼は自己の「専門的関心」の統一を見つける」（Hua XV, 415）と述べている。フッサールによれば、自我のその都度の特別な関心は、本能に象徴されるような永続的な生の関心によって絶えず規定されていると同時に、職業や、家族、国家などに向けて指示されている<sup>31</sup>。すなわち、自我の関心の連関は、各自我に固有のものであると同時に、ごく社会的なもの、間主観的な周囲世界との関係において形成されるものでもあると言えよう。このことに関連して、フッサールは、周囲世界との関係において間主観性と不可分である習慣性について、「私はずっと以前から常に、私が覚えている限り、既に他者との繋がりの中にいたことから、私の顕在性と習慣性は、……ひとつの周囲世界に関係しており、この周囲世界は既に他の人々を含み、他の人々との交流において形成されており、またつねに新たに形成されているのである」（Hua XV, 136）と述べている。生活世界は、まさに他の人々との交流の場として存在するのであり、したがって私の習慣的関心は、いつも既に「私達の習慣的関心」として形成されていることがここに示されている<sup>32</sup>。すなわち、私達の関心の方向は私達の文化的・歴史的状況に紐づけられたものであり、たとえば何某かの食べ物に向けられる衝動ひとつ取ってさえも、それは周囲世界との関係を反映した、習慣化ないしは文化化された衝動（本能）であると言いうるだろう。

すでに発達した段階にあって私たちが空腹を感じる時、私たちはすでにその空腹という本能的欲求を何かしらの「食べ物」に向けられたものであると既に受け取っている。いわば、本能的衝動を何かわけの分からないものとしてではなく、既にそこで類型化して受け取っているのである。そしてまた、その欲求がたとえば「フライドチキン」という具体的且つ個別の対象に向かうのは、その都度の私の身体的・外的環境の影響があると同時に、私の所属

する文化的環境における食習慣の反映でもあるのだ。

ここに見られるのは、類型化の及ぶ範囲は外的な認識対象のみではなく、本能や衝動のあり方にさえ深く組み込まれているということであり、その意味で自我に対象化されるあらゆるものは類型化を通して現れるというフッサールの言はまさに正しくあるように思われる。フッサールは具体的な対象を自分にとって何らかの価値を持ったものとして、推論を経ずに直接的に観取する意識の働きを「価値覚 (Wertnehmung)」という造語で呼び、知覚と類比的に論じるが (vgl. Hua XXXVII, 292)、類型はこうした価値覚の形成においても直接的に関与しているように思われる。

#### b) 正常性

フッサールにとって、「正常性 (Normalität)」とは、世界が慣れ親しみをもったものとして捉えられるための、まさにその基準であると言ってよい。『経験と判断』におけるタイプの議論に示されるように、経験された様々な諸対象は、ただそのまま過ぎ去っていくのではなく、「経験の地平」として、後に到来する新たな諸対象を規定する働きを為すことになる。諸経験に付随する正常／異常という事態も、この過去の経験の地平と相関しており、Moranは異常性について、(過去の経験に依拠して) 事前に予描された意図ないしは予期の中断として特徴づけている<sup>33</sup>。それは単純な予期外れの場面を想定しているというよりも、これまで適用してきたタイプの妥当性の喪失の場面であると言いうるだろう。逆に言えば、正常であるとは、過去に親しんだ経験と同様の仕方で、予期や意志を阻害することなく、スムーズに現在の経験が流れることを指しているといえよう。

正常性の概念は、当初、フッサールが心理物理的条件と呼ぶものに対して使用され、そこにおいては、各感覚器官が整合的に機能する正常な知覚の場合と、異常に機能する知覚の場合とが対比されている<sup>34</sup>。とはいえ、正常性は、知覚認識のみに限定される概念ではなく、また、個々人が実際に経験したものだけに依拠するのでもない。むしろ、それは、周囲の他者やそのコミュニティ、あるいはそこで共有された文化や伝統といった社会的なものとの関係によって構成されており、幅広く複雑な性格を持っている。

Ferencz-Flatzは、フッサールの草稿において、正常性は「平均化」と定義される一方で、一種の「規範」として見做されていると指摘している<sup>35</sup>。通常の場合、人間はある規範に基づいて生活しているが、「通常のライフスタイル」というこの規範的な性格は、合理的に動機付けられた選択に基づいているというよりも、実際には、「社会化された実践的な習慣」(Hua XXXIX, 506) とフッサールに呼ばれる伝統などに依拠している。無論、このような伝統 (たとえばライフスタイルや言語など) は、その者の所属する国や地域、家族など、その周辺状況によって異なるものであり、個々人がまったく同様の正常性を持っているわけではない。しかし、Ferencz-Flatzは、個々の具体的な状況は、間接的に繋がっているものだ

とし、「諸状況はすべて、間主観的な同時性と継起性、具体的かつ間主観的な時間において立ち現れる」(Hua XXXIX, 197) というフッサールの言葉を引用している<sup>36</sup>。たとえば、会社の事務員の状況は、その企業全体の経営体系やムードなどに包括され、余暇の過ごし方といった個人的生活もまたその職業生活との兼ね合いにおいて形成される。そして、究極的に言えば、どんな大きな社会集団やどんな個人も、間主観的な地平としての世界を共有している。フッサールにとっては、「あらゆる人間にとって不変の形式としての、この生活世界の普遍的な構造」(Hua XXXIX, 196) を明瞭にすることこそが現象学の一つの目的なのであり、私達の経験は常にその根底において、世界地平において下支えされている<sup>37</sup>。

### c) 周期性

そして、Ferencz-Flatzによって最後に挙げられるのが周期性である。フッサールが習慣性について述べる際によく使う語としては、「反復 (Wiederholung)」というものが挙げられる。習慣的な関心にせよ、正常性にせよ、その特色は、普段から繰り返し経験されるものとして把握されていることにあり、そこではその事柄の持続性ないしは「周期性 (Periodität)」が核心を成している。Ferencz-Flatzは、フッサールが、生活における特定の時間の流れを、私達の諸関心が生起し、互いに干渉する仕方と関連付けていると指摘する<sup>38</sup>。そして、そこにおいてその最たるものとして挙げられるのが、私達の「勤務時間」を支配する専門的関心と、余暇、趣味に対する関心、またはそれらを中断ないしは完了して行われる変転の周期である。

Ferencz-Flatzは、こうした変転は、特定の類型的な周期性によって特徴付けられているとするが、この周期性は、たとえば空腹のような自我の内的な衝動の変転や、周囲世界の状況の変転をも含めたものである。実践的関心の周期性は、一方では、周囲世界の自然の周期性に関連しており、他方では、本能の生物学的周期性に根差している<sup>39</sup>。そして、これらは独立的ではなく、相互に関連し合うものである。たとえば、Ferencz-Flatzは、睡眠と覚醒の周期的な変転は、明らかに衝動と自然のサイクル（たとえば昼と夜の交互の変転）の両方の側面が絡み合っていると指摘している (Ferencz-Flatz, 2014, p. 79)。

日常と呼ばれるものは、予期を可能にするような、周期的かつ類型的に再現される状況を意味しており、Ferencz-Flatzは、日頃のルーティンの行動を描いたフッサールの記述に着目している<sup>40</sup>。すなわち、私達は毎朝目を覚ましたそのときから、身支度や朝食、出勤などに始まる、一日の特定の行動や状況の連続を眼差しており、日常の具体的な状況は、開始時点から予め、時間的に明確な順序で地平的に統合されている、というものである。そして、それは単に今日が昨日と同じように流れるという単純な仕方では予期されるのみならず、たとえば特定の曜日の特別な勤務状況や、休暇として設定されている週末などに相応した、より広い時間枠を取った類型化であり、それは「世界時間 (Weltzeit)」の全体的な周期性に属

しているとされる。すなわち、月曜日は他の曜日を含んだ一週間の全体的な順序に属していると共に、それ以前の月曜日との相関性を持っており、それと同様、火曜日はその前の火曜日と、あるいは月末はそれ以前の月末と……というように、連続する状況の周期的なリズムを持っているということになる。

こうした視点において、周期性は、スケジューリングのような作業において知的に利用されるのみならず、たとえば家を出るときにはドアを施錠する、職場に出勤したらタイムカードを押すといったような、特に意図せずとも遂行できるような日常のルーティン的な行動をも可能にする。こうしたルーティンは、改めて後で振り返ってみると、実際に自分がそれを確かに実行したのか不安になるほど、特別な注意を払わずに行ってしまうものだが、それは、「ドアを開け、外へ出て、鍵を閉める」という諸々の行為連関全体が、継起する一連の流れとして時間的順序をも含んだ形で受動的な領野で類型化されているからこそ可能になるのである。そして、その「ドアを開け、鍵を閉める」というルーティンは既に形成された周期的な志向に従って、ドアを開ける前からそれに向かって既に備えているのであり、たとえば朝の出勤という大きな状況の一部として働いているのである。このように、フッサールにおける周期性は、世界と自己の双方の状況を相互的に絡み合わせながら滑らかなリズム性をもって生きることに関与している。

Ferencz-Flatzはこのように、上記の三つの要素を中心として、状況の類型化——いわば私達の習慣的な生活の構成を考えているが、重要なのは、これらの要素は互いに相補的にあり、それぞれに絡み合いながら私達の日常性を構成していることである。習慣的な関心は、私達が通常、周囲世界を如何に認識し、行為するかといった、世界との基本的な関係の仕方を規定するものであり、正常性は日常的な状況が自我にとって慣れ親しんだものとして捉えられるためのまさにその基軸を成している。そして、周期性の構成は、繰り返し現れるものとして習慣的な関心や正常性が形成されるための不可欠な契機として働いているのである。とりわけ重要なのは、朝起きたその時からその一日の流れが先取りの予描されているといったように、私達はその場面に到達するその前に既にそれに備えているということである。すなわち、私達は個々の場面に応じてその都度それに適した習慣を筆筒の奥から引き出しているのではない。私達は関心の習慣、正常性、周期性といった諸々の基盤の上で——すなわち私達の生活状況の類型化を通して、常に絶えず自己の習慣に対して実践可能性を開いているのである。

こうして見たとき、フッサールにおける類型の概念は、知覚認識の構成といったある意味で静的な場面を越えて、生き生きとした実践的な場面において、いわば身体化された知として活用される概念であることが示される。そしてまた、こうした類型の機能に示される習慣の性質は、ある種の機械的な原理として無機質に働くようなものではなく、個々人に固有の



様々な関心や活動が躍動するためのまさにその地盤として、フッサールにおいて積極的に評価されていることが明らかになるのである。

---

註 『フッサール全集』(Edmund Husserl. Gesammelte Werke (Husserliana). Aufgrund des Nachlasses veröffentlicht unter Leitung des Husserl-Archivs Leuven, Den Haag.) からの引用は (Hua 巻数, 頁数) の略称を用いた。また、『経験と判断』(“Erfahrung und Urteil”: Untersuchungen zur Genealogie der Logik. Hrsg. von L. Landgrebe. Prag: Academia / Verlagsbuchhandlung) からの引用は、(EU, 頁数) の形で示した。さらに『フッサール資料集』第八卷 (Husserl, E. (2006). Späte Texte über Zeitkonstitution (1929-1934). Die C-Manuskripte. Hrsg. Von D. Lohmar. New York: Springer.) からの引用は、(Hmat VIII, 頁数) の略称を用いた。また、既に訳書が出ている文献に関しては、訳出に際して邦訳を適宜参考にした。

## 脚注

<sup>1</sup> フッサールの『イデーンI』から『イデーンII』までの過渡期における自我概念の変遷は、(榊原哲也、2009、第二部、特に第五章)を参照。

<sup>2</sup> ドイツ語で「習慣」に類する語を、フッサールはその草稿で何種類か用いているが、その区別は厳密に定義されたものではない。傾向から言えば、特別な意味を込めずに一般的な意味で習慣を語る際には(あるいは、自然的態度において無反省的に受け入れられている習慣を語る際には)、フッサールはHabitusやHabitualitätではなく、Gewohnheitという語を使用する傾向がある。たとえば『イデーンI』において、フッサールが現象学的還元の対象として習慣を挙げた際にはGewohnheitという語が使用されている(vgl. Hua III, 67, 69)。しかしながら、『イデーンII』において改めて自我の習慣性が現象学的議論の対象として挙げられた際にはHabitusやHabitualitätという語が多用されている(vgl. Hua IV, 111, 266, 277, 295)。とはいえ、先述したようにフッサール自身がこの術語の定義について明記した箇所は確認できず、その使い分けの仕方も必ずしも厳密なわけではない。また、一部には、アリストテレスからの伝統に倣ってHexisというギリシャ語を用いている箇所もある(vgl. Hua XIV, 195)。このように、術語的な見地から言えば、フッサールにおいて習慣という語はいささか曖昧に使用されている感があるが、使用頻度や汎用性から言えば、フッサールはHabitualitätという語を一番好んで使用していたように思われる。

<sup>3</sup> Moranは、フッサールの生前に刊行された著書においてHabitualitätやHabitusという語が出た頻度を実際に調べているが、『デカルト的省察』に幾らか使われている以外は数えるほどしか見当たらないと報告している(vgl. Moran, 2011, pp. 59-60)。

<sup>4</sup> Moran, 2011, p. 59.

<sup>5</sup> Cf. ibid.「操作的概念」とは、オイゲン・フィンクが行った哲学における概念の区分において、考

察の主題となる「主題的概念」に対して、主題化されない仕方、ある論理展開ないしは論理体系などを暗黙のうちに規定している概念とされる。

<sup>6</sup> 予描 (Zeichnung) のドイツ語の元々の意味はスケッチや下書きという意味であり、次にもたらされる充実の内容を受動性において前もって描き出し、待ち受ける能作を指す。

<sup>7</sup> このことから類型は一種の知的な成果物としても捉えられるが、それは数学のような「理念的本質」を扱う学問とは区別され、「前学問的」、あるいは「部分的に学問的」であるような思考の産物とされる (vgl. Hua XLI, Nr. 23)。

<sup>8</sup> 当然、このとき、諸対象間には、非類似的な諸部分も同時に存在している。しかし、その差異こそが、類似した諸部分をより対照的に際立たせる働きをも同時に為しており、一般的類型の基軸を形成するともいえる。見たことがない犬種でも、それを瞬時に「犬」の一種であると統覚できるのはそれによってであると言えよう。

<sup>9</sup> フッサールは、過去の地平において沈殿し、保持されたものが現在に与える影響について次のように述べている。「過去の布置は、覚起されると現在に押し被さり、現在において類似の布置を生み出すことができる」(Hua XI, 190)。

<sup>10</sup> Cf. Lohmer, 2014, p. 49.

<sup>11</sup> ここでいう「特殊的」は「個別的」と言い換えてもよい。ローマーは「強い一般性を持った類型は多くの副-類型 (sub-type) を持つ」と特殊な類型を表現している (Lohmer, 2014, p. 51)。

<sup>12</sup> 一見すると類型は、言語的な概念と混同されかねないが、それには注意が必要である。ローマーによれば、たしかに類型と概念は部分的には重なり合っており、双方とも、対象の本質的な特性と関係づけられるような明確な内容を持ち、外延があるという点で共通してはいる。しかし、類型が、自己の経験によって基づけられた類似的な諸対象の集合であり、その外延が比較的狭く限定されているのに対して、概念の外延は基本的に無際限である。ローマーは、類型と概念は理念化という契機によって隔てられていると指摘している (Cf. Lohmar, 2014, p. 53)。

<sup>13</sup> 田口は、類型の「一般性」という性格に注目して、類型的に事物を見るに際しては、「ほとんどの場合、われわれは対象がもっている一般的特徴や機能しか見ていない」と指摘し、類型化が生じることで、「眼の前の個体の個性はまたしてもあまり顧慮されなくなるだろう」と論じている (田口、2014、138頁)。これは、類型が習慣的に形成されることで、事物を文字通り、「型」に嵌まった仕方で見えるようになってしまうという、類型化ないしは習慣化の負の側面に対する指摘としても捉えられよう。田口の指摘は確かに一面の事実ではあるが、本文で述べたように類型の一般性に程度差があることを顧慮した場合、特殊な類型の機能に即して言えば、その類型化は、個体の固有の特徴や状態に対する感度を高めることにも寄与していると指摘せねばならない。また、フッサールが、「未知性はつねに同時に既知性の一様相である」(EU, 34) という印象的な一文に示しているように、ある新しい個体に出会った際のその「新しさ」の感覚、換言すればその個体の持つ唯一性すらも、類型の地平との対照化においてこそ初めて規定可能なものなのである。

<sup>14</sup> また、田口は、「類型の違いは、単一の尺度（たとえば大きさ）による一元的な区別であるわけではなく、現象の中に幾重にも張り巡らされた、多重的な類似性の連関から成り立っているのである」と指摘している（田口、2014、143頁）。すなわち、類型の連関は、類型的一般性の段階差（たとえば「犬」に対する「柴犬」）と、類似性（たとえば「柴犬」に対する「秋田犬」）といったように、縦横に広がっていると言えよう。

<sup>15</sup> フッサールは、類型の修正の可能性について次のように述べている。「私は、ある対象をその何であるかにおいて同一視するが、その何であるかが、よく見ると、違っていることが明らかになる。そのとき、私は修正しながら同一視するのであり、この継続される修正のもとでの同一視は、一貫して可能であるとされねばならず……（以下省略）」（Hua XLI, 233）

<sup>16</sup> 受容性（Rezeptivität）は、受動性において先構成されたものをただ受け取るという、自我の「能動性の最低段階」の働きを示している（vgl. EU, 385）。習慣的行為における意識の状態は、受動的であるというより、むしろこの受容性においてあると言った方が正確であるように思われる。

<sup>17</sup> フッサールは、「予描」という語と同じ意味合いで、来たるべきものを眼差す、将来に向けた想起という意味で「先想起Vorrinerung」という用語を使うこともある（vgl. Hua X, 107, 62f.）

<sup>18</sup> （Lohmar, 2014, p. 52.）あるいは、（Moran, 2011, pp. 64-65）を参照。

<sup>19</sup> また、既知性という背景的地平があつてこそ、初見の対象経験に伴う「新しい」という認識が成り立ちうる。フッサールは、「未知性はつねに同時に既知性の一様相である」（EU, 34）と述べている。

<sup>20</sup> 規定性の不完全性は、我々の意識が過去-現在-未来を備えた生き生きとした現在の流れにおいて捉えられる以上、必然的なものともいえる。また、既存の類型と個別的对象との間の合致のずれこそが、より高度に抽象化・理念化された類型が形成されるための重要なファクターともなりうる（vgl. Hua XLI, 231f.）。

<sup>21</sup> 既にそこが通行不能であることを「知っている」にも関わらず、つい体がそこに向いてしまうという事態は、類型が単なる明示的な「知識」とは違うことを表している。それはむしろ、身体知に近いものとして捉えられよう。

<sup>22</sup> Ferencz-Flatz, 2014, p. 74.

<sup>23</sup> Zhok, 2014, p. 126.

<sup>24</sup> フッサールも、衝動と結びついた習慣を「盲目的な傾向性」（Hua IV, 221）と称し、注意を払わずに衝動に応答する、「対向以前の行い」（EU, 91）について考察を展開している。また、『イデーⅡ』においては、諸行為の連合的ないしは習慣的傾向について語る中で、煙草を「思わず（unwillkürlich）」手に取るという事例を挙げている（vgl. Hua IV, 258）。

<sup>25</sup> このことはすなわち、類型が予期の内容に一定の形式を与えている一方で、習慣は、どのような類型が、到来するヒュレー的对象と結合するか、その傾向を方向付ける力を持っていることを意味している。類型概念は「習慣的な所有物」と言われているように、あくまでもより包括的な概

念としての習慣性の一成素として考えることによって真にその機能を理解できるのである。

<sup>26</sup> 本稿では詳述できないが、『受動的総合の分析』における空虚表象の記述と、『経験と判断』における空虚表象の記述は、部分的にかなり類似している点がある。

<sup>27</sup> フッサールは『現象学の限界問題』において、本能と衝動を区別し、本能は本来的には「何かに対する本能」という目的性格を持たないと論じ、空腹が「空腹」の衝動として如何に形成されてくるかを考察している (Hua XLII, 55)。

<sup>28</sup> ここで「慣れ親しんだ事物として」と付け加えねばならないのは、その煙草がその個人にとって何か得体の知れないもの、「異物」として認識されるべきものであれば、やはりそこで自我の注意を引きつけるように思われるからである。

<sup>29</sup> Cf. Ferencz-Flatz, 2014, § 3.

<sup>30</sup> フッサールは、『イデーン II』において、諸経験が後にまでその痕跡を残していくことを「彗星の尾」に例えるなどして随所で強調している (vgl. Hua IV, 179, 111, 129)。

<sup>31</sup> Vgl. Hua XIV, 67-70, Moran, 2011, p. 69.

<sup>32</sup> フッサールは伝統と同義的に「共同体の習慣性」や「間主観的習慣性」という語を使用し (vgl. Hua XIV, 230)、習慣性の概念に社会的性質を与えている。ブルデューのハビトゥス概念はこれをさらに発展させたものとMoranは指摘する (Cf. Moran, 2011, pp. 65-66.)。

<sup>33</sup> Vgl. Moran, 2011, p. 63.

<sup>34</sup> たとえば、ある薬を服用すると視界が赤味がかかるという例をフッサールは出している (vgl. Hua XIV, 300)。

<sup>35</sup> Cf. Ferencz-Flatz, 2014, p. 76.

<sup>36</sup> Cf. ibid, p. 77.

<sup>37</sup> とはいえ、この観点を強調する場合、フッサールにおける正常性と異常性の対置は、その意義が若干薄められているように思われる。すなわち、普遍的な構造を持つ不変の形式としての生活世界という存在を念頭に置く場合、異常性とは、普段の自己の諸状況に即した見方とは異なるモードで世界を見ることに過ぎないことになり、その根底において常に同一の世界が共有されていることには何ら変わりはない、ということになるのではないか。このことは他者との相互理解の可能性を保証すると同時に、異常なもの、異なるものとの出会いという特別な経験もまた、フッサールにとっては共有可能な生活世界の延長上にあるものとして見られていることになるのではないだろうか。

<sup>38</sup> Cf. Ferencz-Flatz, 2014, p. 78

<sup>39</sup> フッサールは、本能の本質的な周期性は、「人間の生のすべての目的の方向づけを理解するために必要な出発点」(Hua XXXIX. 583) であるとしている。

<sup>40</sup> Cf. Ferencz-Flatz, 2014, p. 79.



## 参考文献

- Biceaga, V. (2010). *The Concept of Passivity in Husserl's Phenomenology*. London: Springer.
- Moran, D. (2011). Edmund Husserl's Phenomenology of Habituality and Habitus. In *Journal of the British Society for Phenomenology*, Vol. 42 no. 1, pp. 53-77.
- Lohmer, D. (2014). Type and Habit, In *Phenomenology of Mind*, edited by Matt Bawer and Emanuele Calminada, IUSS Press, pp. 48-64.
- Ferencz-Flatz, C. (2014). A Phenomenology of Automatism, In *Phenomenology of Mind*, edited by Matt Bawer and Emanuele Calminada, IUSS Press, pp. 65-83.
- Zhok, A. (2014). Habit and Mind. On the Teleology of Mental Habit, In *Phenomenology of Mind*, edited by Matt Bawer and Emanuele Calminada, IUSS Press, pp. 117-129.
- ディーター・ローマー (2004)、「フッサールのベルナウ草稿につながる予持の分析」、『フッサール研究』 Vol. 2、浜渦辰二訳、pp. 191-206.
- 田口茂 (2014)、『現象学という思考』、筑摩選書
- 榊原哲也 (2009)、『フッサール現象学の生成』、東京大学出版会

# **Habitus und Typus**

## **——Typus als den praktischen Begriff nach genetische Phänomenologie——**

MASUDA, Hayato

Das Ziel dieses Aufsatzes besteht darin, zunächst den Begriff der “Typus,” und “Habitus oder Habitualität,” Husserls genetisch phänomenologisch darzustellen, und zweitens in der Bildung der Typisierung die Beteiligung der alltäglicher Handlung zu erhellen.

In § 1 dieses Aufsatzes wird zunächst den Begriff des Habitus und des Typus nach Husserls Phänomenologie kurz erklären. In § 2 wird dann den Typus mit der Erwartung in die enge Verbindung bringen. Darin will ich darstellen, dass die Funktion der Typisierung auf das Interesse und den Habitus des Ichs noch beziehen, und die begriffliche Ähnlichkeit zwischen der Bildung der Typus und anderes habituelles Besitz, zum Beispiel Vermögen und Trieb, darstellen. In § 3 wird ich die situationale Typisierung durch die Verhältnis des habituelles Interesse, der Normalität und der Periodizität analysieren. Durch die Analyse will ich den Habitus und die Typus nach die Bildung des habituelles Leben des Ichs behandeln.